



特集

人が集う、小さな灯 とみか 十三日

5月13日、着町に一つの「場」が生まれました。それは、(株)モリノバが運営する「十三日（とみか）」。築100年を越える2階建ての古い建造物をリノベーションし、飲食店やシェアオフィスが集まる複合施設としてオープンしたのです。

人が集う、小さな灯 「十三日」。

着町商店街の南側にある「十三日町」は、毎月13日に市が立ったことに由来する旧町名。藩政時代に遠野街道から入る商人で賑わった通りです。

今では閑静な、その通り沿いにオープンしたのが古い建物を改修した複合施設「十三日（とみか）」。名称は、近隣の人々に親しまれてきた愛称を受け継いだものです。道路に面した1階には、定食やカレーなどを提供する食堂「エピソードキッチン」があり、手づくり惣菜や焼き菓子などの販売も行います。隣に店を構えるのは、「ステーキ&グリル MARU3」。岩手を代表する伝統工芸品「南部鉄器」を使い、牛肉を中心に肉料理を提供します。2階には24時間利用できるシェアオフィス「BUNBO」を開設。クリエイターを中心に、人や仕事の繋がりをつくる場と考えており、フリーランスに限らず、企業のサテライトオフィスなどにも利用できます。

そして、建物全体の管理と運営を担う(株)モリノバがめざすのは、古い建物を改修し商業施設として営業することではなく、今あるまちに新しい風の通り道を生むこと。つまり「十三日」は、その一つのカタチであり、人が集うきっかけになる灯なのだといいます。果たして、どんな



「東京と盛岡を行き来しているのが、盛岡を知らない人たちが来るきっかけも、投げかけていきたい」と浅野さん

経緯でオープンに至ったのか、(株)モリノバ代表を務める浅野聡子さんに伺いました。

場が生まれる出発点は？

神戸出身の浅野さんが盛岡に暮らすことになったのは、ご主人の転勤が理由でした。初めて訪れた盛岡を散策しながら見つけた、居心地のよい店やカフェ。それらを趣味としてカメラに収めて綴ったブログ「盛岡さんぽ」は多くの人から注目され、一冊の本にもなっています。その後、東京に戻った浅野さんですが、仕事であるウェブサイト制作の拠点を東京と盛岡に構え、毎月盛岡に足を運んでいました。その過程で見えてきた幾つかのことがあったといいます。

「ウェブサイト制作を希望しながらも、誰に依頼すればいいのかわ



昨年9月のお披露目会の様子

わからないとおっしゃる地元企業さんが多く、実際にウェブ専門のデザイナーが県内には少ないこと。一方で、岩手出身首都圏在住ウェブデザイナーの中には、Uターンしたくても仕事があるのかと不安を感じている人も多いようです。いずれ、個人がどうにかできる問題だとは思っていなかったのですが、ちょうど自分が借りていた市内のシェアオフィスを出ることになりました。じゃあ、空き家を活用して自分の事務所を兼ねたシェアオフィスをつくったら、ウェブビジネスのマッチングも解決できるし、UターンやIターンにも

つながるのでは、と」。

常々、盛岡のまちに空き家が増えてきたことに、寂しさを感じていた浅野さん。ちょうど、東京で空き家のリノベーションに携わる方と仕事していた頃であり「盛岡でも空き家を再生して何かできるのでは」と思ったのが、活動のはじまりです。

思考の過程も、共有していく。

こうして、2015年12月、クリエイティブディレクター、商業開発コンサルタント、不動産店、建築・店舗設計者、浅野さんを含む5人がメンバーとなって、まちづくりを考える団体モリノバが始動（のちに法人化）。まずは、自分たちが何を考え、何をやりたいのかを知ってもらうため5回に渡って開催したのが「盛岡さんぽ会議」でした。

「普段、自分が住んでいるまちについて考える機会ってそう多くないと思います。盛岡はどういうまちか、こういう要素が増えたら、もっと素敵なまちになるんじゃないか。あえて、それを皆で考えて共有していく時間でした」。

すると、この会議に参加した岩手県味噌醤油組合の理事が、モリノバの活動に興味を持ち、解体予定だった建物を見学させてくれることに……。それこそが、現在の「十三日」でした。人通りは少ないものの、建

物の佇まいや通りの雰囲気にも可能性を感じた浅野さんたち。2016年春、さっそく、建物のリノベーションとテナント募集に向けて動き出します。

同年9月には、改装前の物件を「お披露目会&内覧会」というスタイルで一般公開。およそ400人が来場して賑わったそうです。並行して、ご近所に対する事業説明や声掛け、完成レセプションへの招待など地域との関わりも地道に続けてきました。お披露目会を含め、壁のペンキ塗りのワークショップへの参加や、オープン後に訪れてくれるお客さんの中には、先駆けて開催した



建物脇のガレージもイベントで活用可能

「盛岡さんぽ会議」参加者も多く、会議の開催は貴重な時間だったと振り返ります。

使い方に余白を残す。

ところで、「十三日」には、まだ使い方が決まっていけないスペースがいくつか残されています。それは単にテナント募集中という理由に依るものではなく、あえて余白を残しているというべきかもしれません。

「たとえば、外のガレージではフランス車好きが集まって、フランス車を愛でる会」をやるうとか、IT交流会の呑み会」などがすでに予定されていますが、テナントの一部も使い方を決めずに残してあります。裏の倉庫部分もまだ手つかずのまま（笑）。「十三日」に足を運んでくれるお客さんから、ギャラリイやイベントに使いたいといった声もあがっていますし、ここは、まちの皆さんと一緒に考えながら活用していく場所でありたいと思っています」。

古い建物をリノベーションして活用することは、まちに新しい魅力を生む「手段」の一つ。「十三日」はその手法をまちの人に知ってもらう一例なのだから。「まちは地元にも、空き家活用や盛岡が盛りあがる活動があちこちで進んでほしい」と浅野さんは話します。